

3-17. 南大東村（沖縄県島尻郡南大東村）

(1) アドバイザー派遣申請の背景

南大東島は、沖縄本島より約 370 km 離れ、特異な自然、文化を活かし「島まるごとミュージアム構想」をコンセプトとして「宝探し」を行いながらエコツーリズムを推進し観光業務を行ってきた。近年は、村のモニターツアーの実施、沖縄県の離島振興等により観光が推進され、県内外において大変注目される地域となった。島では大手旅行社と地元の観光業者やホテルが提携して、定期的なツアーも生まれ、個人的にも島を訪れる観光客が増加している。そのために、今後も観光を島の新たな産業として強化しようと、ホテル、観光業者、飲食等の有識者が自主的に集まり観光推進協議会を立ち上げた。

しかし、村の行政や観光協議会等が観光を推進していく中で、これまでの、見せるだけの「どこにでも」ある観光ツアーだけで、これからの島の観光は発展しないのではないかという懸念が生まれた。そこで、昨年度から作成し、今年度完成する「食のフェノロジーカレンダー」を活用して新たな観光ツアーを実践していくことができないか検討した。その結果、次年度には、食を中心としたエコツーリズム推進をテーマに、実際にモニターツアーを企画し、実践する計画である。

そこで、計画を立て実践していくためには、どのような観点から考え、実践すれば良いのか分からない状況にあり、今後の展開発展のためアドバイザー事業を利用させていただいた。



島の食材を利用した給食を味わう（学校給食）



ワークショップ



島の食材を利用した特産品開発

(2) アドバイザー派遣の概要

日 時	平成 25 年 1 月 29 日（火）～平成 25 年 1 月 30 日（水）
場 所	南大東村役場（ヒヤリング場所及び意見交換）、南大東小中学校・村内宿泊ホテル（2 カ所）・村漁業組合、離島振興総合センター
ア ド バ イ ザ ー	京都嵯峨芸術大学 芸術学部 観光デザイン学科 教授 真板 昭夫 氏
参 加 者	ヒアリング：生活改善グループ 漁業組合 ホテル関係者 意見交換：村役場関係者 南大東小中学校・教育委員会 ワークショップ：南大東村地産地消協議会 南大東村観光推進協議会 商工会 計 38 名
スケジュール・方法	【1 日目】 ・新ホテルの状況視察（ホテル 気楽） ・南大東小中学校（地域素材を使った給食メニューを児童生徒一緒に給食） ・漁業組合にて食のカレンダーの確認と利用方法についてヒアリング ・「食のフェノロジーカレンダーを活かしたエコツアーの構築」をテーマにワークショップ開催 【2 日目】 ・南大東村役場にて教育委員会及び観光担当課長等との意見交換 ・生活改善グループの活動を見学（場所 離島振興総合センターにて） ・生活改善グループへのヒアリング

(3) アドバイスの内容

●ワークショップより

（観光協議会より以下のテーマを提案）

- 1 この島の財産を利用して、どのようなツアーができるのか。
- 2 地域資源を活用した旅行ツアーとはどんなものなのか。
- 3 実際にツアーを企画し、受け入れて行くためにはどうしたら良いか
- 4 食のフェノロジーカレンダーを利用した具体的なツアーはできないか。

以上のようなことを具体的にお互いで話し合うと同時に、アドバイザーの真板先生からアドバイスを頂けたらと考えた。

（食のフェノロジーカレンダーを実際に確認する）

- ・島の活性化に大変役に立つ、島の観光にぜひ活かしたい。また、島の地産地消発展に大いに役立つと思う。
- ・カレンダーに示されている料理を作って出すことができれば良いのだが、実際にできるかが問題。誰が作るか、誰が手配するか等問題もある。
- ・島の食を中心とした観光プログラムが構築できると思う。
- ・観光だけでなく、島の給食等に活かせるではないか。

（アドバイザーより）

- ・南大東島には、何回か来島してきたが、自慢するものは、このフェノロジーカレンダーに示されているようにたくさんある。
- ・これまで、行政や商工会、観光推進協議会等で行ってきたモニター等の実施で、現在はある程度は構築され

た形で、定着してきている。

- ・ しかし、今ある体験ツアー等は、極端にいうと、どこにでもあってどの島でも行っているようなもので、今後観光客を伸ばしていくためには、転換期にきていると思う。
- ・ そこで、これからのツアーを考えるためには、次の点に注意してプログラムを自分たちで作り、発信する着地型観光を目指した方が良いのではないかな。

- 1 ストーリー物語を作る：体験プログラムに、南大東島独自のストーリーを持たせる
- 2 素材を大切に：食ならば、南大東島の食材を利用した料理を提供する等。
- 3 他にはまねをできないもの本物を見せる場所：証明する場所、実際に食材がある場所等本物を見せて、本物を食べさせる場所

- ・ 人の五感に訴えるような体験プログラムを構築できれば理想である。
- ・ また、プログラムに大切な要素である。環境、文化、教育（学び）、交流、経済（料金）を考える必要もある。
- ・ 例えば、1年間を通じて体験プログラムを作るのではなく、季節に合わせて（春夏秋冬）年間4回程度まず体験プログラムを作ってみる。
- ・ 更に、「食」は全ての体験のフィナーレとして利用することが大切で、実際に地元の人で作った体験プログラムを疑似体験することも必要だと思う。
- ・ そして、ストーリーの検証、プログラムの不備、準備、等あらゆる想定を確認しながらプログラムを完成させる。
- ・ 一番大切なのは、まずやってみることが大切。実際に、プログラムを実施することで見えるもの、必要なことがわかってくると思う。
- ・ 行動をおこさなければならぬ始まらない。

他に幾つかの事例を交えてアドバイスをいただいた。



●行政との意見交換会（観光担当課）

（アドバイザーより）

- ・ フェノロジーカレンダーの内容を確認してもらいたいのですが、実際に活用していく予定を聞かせてほしい。また、地産地消協議会を立ち上げているとのことだが、

（役場）

- ・ 現在、村では地産地消を推進するために協議会を立ち上げるとともに、野菜等を栽培できる大型のハウスを建築中である。今後は、野菜の安定供給を図り、学校、食堂等で活用する仕組みを作りたいと考えている。

（真板氏）

- ・ 期待している。島の食材を安定供給できるのであれば、いつでも地元産の食材が手に入ることができて、観光推進協議会が目指す、ツアーの際役立つと思う。
- ・ 観光推進協議会等では、次年度観光ツアーを実施予定しているが行政としての支援はどうか。

（役場）

- ・ 観光推進協議会はまだ組織として、基盤が弱いので商工会と連携しながら、食を中心とした新たなツアー作り支援のため、モニターツアー等を実施する事業を計画している。

（真板氏）

- ・ 行政からの支援がおこなうことは良いことで、行政側が、粘り強く、継続的に営業を続けて行くことが大切だと思うので、新たな産業としての観光の推進、地域活性化に向け頑張っていただきたい。最後に、ツアー

を企画し、実施するときには日本エコツーリズム協会も協力できるものがあれば協力できると思う。また、個人的にも協力していくので、できることがあれば相談してもらえればと思う。

（その他 ヒアリング漁業組合等）

（真板氏）

- ・ フェノロジーカレンダーを利用して、漁業体験を企画してもおもしろい。
- ・ 食をメインにした、宿泊プランを作ってみては。

（4）アドバイザー派遣の効果

●参加者や関係者に与えた効果

- ・ 参加者や関係者は、今回のアドバイス前には、どのような観光ツアー、仕組を作るか等、特別なプログラムを企画しなければならないと考えていた。特に、今年度「食のフェノロジーカレンダー」が完成するので、それを活用しなければと体制も整わないうちに、プログラムを実施する予定でいた。しかし、今回のアドバイスとお話を聞いているうちに、地域の魅力というものは、何気ない日常にある場合が多いということに気付かされた。また、現地でしか味わえない食、貴重な体験は、地域の観光資源であり、隠れた資源を発信することは、農業や漁業といった地場産業を盛り上げていくことだと感じた。
- ・ 食のフェノロジーカレンダーの活用は、新たな島の魅力の発信ツールであり、島の地産地消を推進いくための「柱」になるということも確認できた。
- ・ 一番の効果は、地域の魅力は、自分たち自身が発見、発信することだと改めて、関係者同士の相互理解ができたことである。

●今後の期待される効果

- ・ エコツーリズムを推進することは、地元の歴史や文化等を住んでいる人たちが見直し、魅力的なものを作り出す努力を引き出すことである。その努力は、島の活性化につながっていくものだと思います。島に住んでいる人が、地域に対する誇りを持ち、問題意識や島を「何とかしよう」とする意欲が生まれることができれば、島の活性化は成功すると思う。
- ・ エコツーリズムの推進により、住民主体の観光を生み出すことに成功すれば、地域活性化に大きな役割を果たすと思う。
- ・ 特に、今回の「食のフェノロジーカレンダー」の完成は、新たな観光戦略の「柱」として活用されることは間違いない。
- ・ 次年度以降は、商工会、観光推進協議会、行政が協力連携して、体験プログラムを企画、開発して実践していく予定であるので、島の新たな魅力を発信するために、島の体制を整え、第2段階を迎えようとしている、島の観光発展につなげていきたい。

(5) アドバイザー派遣を実施して（地域からの声）

●参考となった事項

（西表島での事例）

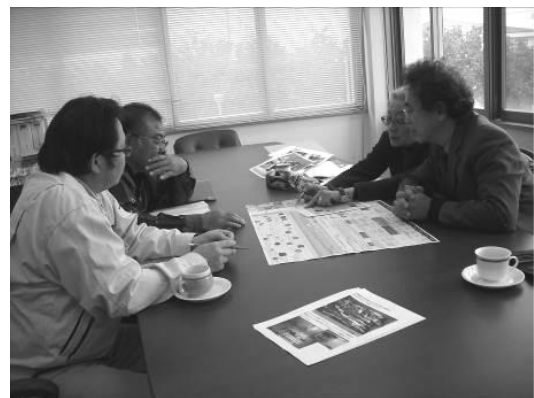
- ・ 西表島では、2月の時期に観光客を呼び寄せるために、今まで島で当たり前のように見ていた蛸に注目した。その蛸は、全国でも最も早い時期に見られるものであった。体験ツアーを企画したところ反響を呼んで、これまで観光客が来る時期でなかった季節に観光客がくるようになった。
- ・ 南大東島も、島では当たり前のことが何かの魅力として、観光資源になるものはないか。常に意識することが大切であると気付かされた。

（アドバイザーの先生の見解として）

- ・ たとえば、南大東島では当たり前に存在する池を利用したツアーを考えたらどうか。
- ・ 南大東島を開拓する際に、池の水は大変重要な役割を果たしたはずであり、その歴史の話を盛り込んだツアーを企画してもおもしろいのではないかとアドバイスされた。
- ・ 地域の魅力は、自分たちで探することが大切であることが改めて確認できた。

●その他感想

- ・ 「エコツーリズム推進アドバイザー派遣」の実施によって、改めて地域が魅力を発見し発信することが大切で、「着地型観光」を目指す必要性を感じた。
- ・ しかし、簡単に「着地型観光」といってもそれを実施するには幾つかの課題もある。
 - 宿泊事業者、地域住民、行政、旅行会社等の連携が必要不可欠である。
 - 地域としていかに観光が重要であるかという意識を持たせるために、お互いに協力するメリットをはっきりとさせる必要がある。
 - 島からの情報発信をどうするか、良い企画を作ってもそれを打ち出すため方法等を考える必要があり、関係者をコーディネートし、企画、営業する等の人材確保も必要である。
- ・ 以上のような課題もある「着地型観光」エコツーリズムの推進だが、地域活性化で島全体が元気で、誰もが羨むような「島づくり」を目指して、これからもエコツーリズムの推進を行っていききたい。
- ・ 最後に、アドバイザーの先生からも「やってみるここと」が大切で、実践することで、今考えられる問題点の他にもいろいろな問題がでると思うが、島として前向きに観光を推進し、地域活性化に結びつけるように努力してきたい。



(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

京都嵯峨芸術大学 芸術学部 観光デザイン学科 教授 真板 昭夫 氏

●地域におけるエコツーリズム推進の取組の現状

- ・ 「島まるごとミュージアム」をコンセプトにエコツーリズムによる地域づくりに一貫して取り組んでいる。
- ・ 今年度、取組体制については、これまでの観光推進協議会が一般社団法人観光協会として発展、発足した。宿泊業者、旅行代理店の他、商業者、漁業者、農業者等も参加し、もはや『『絶海の孤島』だけでは飽きられる』との危機意識をもち、エコツアープログラムや地域ブランドとしての新商品開発に取り組もうとしている。特に平成 22 年以来、エコツアープログラム開発のベースとして「食の宝フェノロジーカレンダー」の作成に取り組んできた。今年度は、これまでヒアリング収集したデータをもとに印刷物の作成を進めている（3 月完成予定 表紙ドラフト添付）。
- ・ 村全体として、地産地消の促進に取り組んでおり、食のフェノロジーカレンダーは、このような島全体の動きと連携しながら作成されており、エコツーリズムを軸に島内諸産業、島内事業者との連携、また島全体への経済波及効果も展望し進めて行く段階に入ったといえる。

●アドバイス（講義等）の概要

- ・ アドバイスは以下の 3 点について討議、助言を行った。

（食のフェノロジーカレンダーの作成指導）

- ・ 作成にあたって漁協、農業者、生活研究会メンバーをはじめ関係者に掲載予定の情報の確認、確定、及び追加的なヒアリング、また写真撮影等を行った。

（食のフェノロジーカレンダーの活用）

- ・ 生活研究会の女性たちが提案した「大東御膳」（コース料理 和風と洋風）を掲載する。この提案の活用の方法について、これを再現した料理を常時、どの店でも提供するのはむずかしいとの意見が出された。これについては各季節に提案のなかの主な品を 2 品ほどは、どこの店でも提供できる「共通メニュー」とし、それ以外は店ごとに特色を出すのが、むしろ良いのではないかと。
- ・ 食のフェノロジーカレンダー問い合わせ先は観光協会があたりになった。

（上記をふまえ、これをいかにエコツアープログラムと結びつけていくか）

- ・ ストーリーづくり。食に関わっていえば、島における食が、どのように成立しているかを示すようなプログラムと結びつける。それぞれの宝の意味をつなげてストーリーをつくる。
- ・ 他の島にはない、ここだけというものを核にプログラムを開発する。
- ・ 作成したプログラムは島人の間で、まずテストツアーを行い、意見をもらう。それによって宝についての情報が更に厚みを増し、プログラムを洗練させていくことができる。また島の人自身が島について一層知るとともに、島全体が同じ方向を向いて事業に取り組むためにも有効である。

●地域に対する印象、コメント（メッセージ）

- ・ 食のエコツアープログラムというエコツーリズムを進める新たなツールができることから、これを前に皆で意見を出し合い、上記の「共通メニュー」の検討等を皮切りに、まずは食と結びつけたエコツアープログラムの開発を進めてはどうか。
- ・ 島の観光関係者は、期待をもって訪れた来訪者をがっかりさせては申し訳ないという気持ちが強い。それは島の人たちの優しさだが、かえって島の良さを伝えることを自制する結果になってしまうのではないか。自然は意のままにならないものであり、そうしたことを、むしろ島の特性として伝えていく方法を考えることもプログラムを深めることにつながると思う。
- ・ エコツーリズムあるいは着地型の観光の振興に対して、基本的に島全体が同じ方向に向きつつあると感じた。と同時に、エコツーリズムの概念についての理解を広める必要性も感じた。



